起るや、向尊及波木井公と不合、飄々然として靈廟を去りしに非ざる歟、其時興尊の心中果して、一派組織、異流唱導、延富對峙、等の思考ありしや、否や、所傳書多くは口傳的、にして幾多研究の末ならでは斷定ずるを得ず、前記せる統紀所述の如きも、波木井公の落髮は弘安四年と記す、然るに興師『弗三于俗家ノ所二能識一』と訓誡せし聊か自家撞着あるを見る況や保守的退歩的の彼派の所懷をや、首肯の點何處にかある、今後又資料蒐集に努め更に陋見を披かむ識者幸に諒とし、愚子に敎ふるに恪なる勿れ。

余の宗敎觀

高一　小坂田正己

凡そ我々人間が、世に生存して行く上に於、誰一人として煩悶苦惱のない者はない。生があれば死があり、老があれば病があり、戀の歡樂には必ず煩悶苦痛が伴ふ。此樣に、人生の大海には幾多の苦しみがある。人間は何うにかして、此の苦しみから脫れやうと考へた。そして、或る人生を超越した、崇高偉大なる者を求め、之を人格化して崇拜し、信仰し歸依し其事に依て自己の慰安幸福を得て現實の苦みを忘れやうと計た。此の人生を超越した或者を信仰し歸依し其に依て自己の慰安を計ると云ふが、即ち宗敎である。であるから宗敎と云ふものは第一義のものではなく第二義のものである。若し人生に色々の苦痛もなく煩悶もなく幸福であつたならば宗敎の必要は起らない宗敎の必要な譯は人生に色々の苦痛煩悶があるからである。故に宗敎の起原に對する人々の見解が何の樣に多種多樣であつても自分は宗敎も哲學と共に他の社會制度と同じく自己の生活を豐富にし活動を統一し平和を保ち幸福を增大しようとする人間生存上の欲求から起つて來たものだと信ずる。

既に宗敎が人間の欲求から生じて來たものであるとしたならば、其の說明の仕方が色々に異つて居ても、要は人生を統一しようとして、設けられ

た、第二義的假定に外あらないのである。神の創造を說いたり佛の絕對を唱へるのは、其れが人生を統一するのに、最も便利な良法であるからである。即ち一義生活の目的を達するための善巧方便である。

大凡宗敎とか、哲學とか、科學とか、謂有人文上の現象は、皆同じく目的を達するために、設けられた、異曲同致の支持法である。

けれども宗敎は他の哲學や科學などとは異つた志向を持つて居る。それであるから自然宗敎特有の樣式が生じて來る政治には政治特有の樣式があり藝術には藝術特有の樣式があると一般である。それで宗敎には人生を統一する方法として、二種の特殊の樣式を用ひて居る、それは佛陀と衆生、神と人、靈と肉、と云ふ樣に二元的對立を說く事である。此の二元的對立を說く事に宗敎の價値はあるのである。即ち佛敎には佛と衆生とを設けて佛を信仰の標的とし我々衆生は之を信仰し精進努力する事によつて自己の慰藉安心は得られると說き基督敎には神と人とを設けてキリストを信仰しキリストに祈りて自己の慰安は得られるのであると說く。斯樣に二箇の對立を說いて自己の勢力己外に客觀の力即ち加被力とか救濟力とかを豫想する事によつて宗敎的氣分は生じて來るのである。是は宗敎に於て最も大切な條件であり、また要素である。宗敎に此加被力とか、救濟力とか、を豫想すると云ふ要素が無かつたならば、宗敎の價値は少しもないのである。

斯樣に宗敎に二元的對立を說く處に宗敎そのものゝ生命があり價値があるのである。けれども但だ佛と衆生天堂と地獄と云ふ如に二箇の對立的槪念を說くだけでは未だ高等なる眞の宗敎と云ふ事は出來ない。何故なればと云へば。それは二元的對立を說くために人の注意と勢力を分裂せしむると云ふ嫌があるからである。現今の樣に人智が發達し宗敎己外の活動に於ては悉く一元の假定の上に活きて居る時代には二元的對立を說く間に何うしても一元的暗示がなくては駄目である。何故駄

であるか、それは宗教の統一法と其他の統一法とが矛盾し衝突するからである。

處で其の一元的暗示とは何んなものか、と云ふに佛教の如に一往佛と衆生と云ふ二箇の對立を立てるけれどもその信仰の標的たる佛は自己を離れて外にはない主觀を客觀化したるもので、其れを信仰し精進努力する事に依て本尊の當相即ち理想境に到達する事が出來ると說くが如きものである

斯樣に人智の發達した時代には一元的暗示がなければ駄目であるとは云ふものゝ又一元的のみにて二元的對立を說かなかつたならば宗教の生命は持續されない若し宗教に二元的對立を說かなくて一元的のみであつたならば宗教は偏に自力教となり終つて倫理の自我實現と異る處がない事になる

元來宗教に二元的樣式を用ひるのは他の社會制度等とは異つた志向を有してゐるから其志向に從つて特有の樣式を用ひるのであると云ふ事は前に云つた通りである。此の二箇の反抗的槃念を說く事によつて人の理想を高め努力の意義を明にせしむるのである、即ち宗教の他に異つた人生の統一法である又一元的暗示を云ふものは宗教發生の根本意義である、故に元意目的を重じて特殊の方法は失しては駄目であり又方法のみを偏重して目的を度外しても駄目である、此の兩者相俟つて始めて眞の宗教と言へるのである。佛陀が權實二智を以て權實二教を說き衆生を化益せられた意も玆にあるのだと思ふ。

要するに宗教と云ふものは人間生存上の欲求から生じて來たものであつて、其の欲求を滿足せんために二箇の樣式を設ける、けれども二箇の對立の間には一元的の暗示が必要である。人智の低い者は二元的對立を說くのを聞いて佛或は神に信仰を捧げてその加被救濟力を豫想して自己の慰安を得、人智の進んだ者は一元的興味によりて生活して行くのであるである。であるから宗教は二元的樣式を離れては倫理と異る處はなくなり宗教は滅亡し一元的暗示がなくては高等の宗教とは云へないと云ふ事に落着する。